

関係社会学と複雑性理論

早稲田大学 桜井洋

1. 目的

関係社会学は社会学における新たな潮流であり、その分、肝心の「関係」あるいは「関係性」の概念はいまだに明確なものではない。関係の概念を広く理解すれば、「関係社会学」は「社会学」と一致してしまい、新たに提案されるべきオリジナリティがないことになる。社会学が対象とする社会秩序は、広く解釈すれば何らかの「関係」にほかならないだろうからである。そこで関係の概念は限定して理解されなければならない。本報告は「関係」の概念を動学的に理解することを目的とする。

2. 方法

本報告では、関係の概念の動学化を、場の複雑性理論を応用することで達成することを試みる。ムスタファ・エミルベイヤーの1997年の論文「関係社会学のマニフェスト」は、その後のこの理論の展開に大きな影響を及ぼした。そこで彼は、これまでの社会学理論は社会的世界を実体あるいは静的な「もの」と考えてきたと批判し、それに対して社会を過程、すなわち動的で展開する関係からなると見る理論を提案し、それが彼にとっての関係社会学なのである。すなわちこのマニフェストでは、関係とは動的で連続的な過程を意味しており、それは「もの」から「過程」へという理論転換を要請する。社会秩序とは確かに動的な過程、すなわちダイナミクスである。そのある側面を構造として静学的に理解することは有意味だが、社会秩序の最終的な理解はそのダイナミクスの理解であるべきであるのは当然である。この意味では、過程のダイナミクス理論としての関係社会学は、社会学の歴史においていつかは来るべき理論だったのである。もちろん、これまでに、社会秩序を動的に理解する理論がなかったわけではなく、その代表は相互行為論だろう。それは個人を方法論的な所与とし、諸個人の相互行為として社会秩序を描き出す。この理論の難点は、ポスト構造主義が批判したように、個人が実体としての主体として理解されていることである。エミルベイヤーの批判もまたこの点にあり、それゆえ関係社会学における過程とは、諸個人の相互行為であってはならない。

3. 結果

社会理論をダイナミクスの理論として定式化しようとしても、そこにどうしても実体の概念が現れてしまうのは、西欧語の特質であると考えられる。それはまず、「もの」「存在」としての行為者を定立し、秩序を、主語としての行為者が「する」動作として記述する。私は2017年に『社会秩序の起源「なる」ことの論理』（新曜社）を刊行し、その中で社会秩序に関する動的な理論は「なる」過程の理論として定式化できることを述べ、場の複雑性理論を提案した。社会秩序が「なる」という形式で運動するダイナミクスは、場の複雑性理論によって定式化できると考えられる。その中心的な概念は自己組織性である。熱力学に起源をもつ複雑性理論においては、秩序は構造のように安定的なものではなく、きわめて不安定なものである。もっとも安定的な状態は無秩序である。それゆえ、社会的な場の複雑性理論は、不安定な秩序が不断に生み出される過程を対象としている。

4. 結論

関係社会学の構想は、場の複雑性理論によってもっとも的確に実現できると考えられる。それによって関係という構造的な概念は、より流動的な場の概念によって置き換えられるべきだろう。関係社会学の理念に、「関係」という概念はふさわしくないのである。